

喫茶人

59

Japan Tea Club

発行所/〒143-0023 東京都大田区山王 2-15-19

編集・発行/特定非営利活動法人 現代喫茶人の会(13 生都協市特 1404)

電話 03-3775-9210 e-mail:jtcnp@gmail.com

ホームページ: http://sites.google.com/site/jtcnp/

五輪を誘致した「おもてなし」

元和歌山大学名誉教授 角山 榮 (現代喫茶人の会 理事長)

「現代喫茶人の会」の理事長を引き受けてから数年、またたく間もなく九十歳を過ぎてしまった。しかも最近はいよいよ限界がきたかと感じる毎日である。二月の総会の頃は、一昨年、昨年、今年も入院中で、理事長辞退をお願いしたのに、色々事情があつて巻頭に寄稿することになった。とくに事務局としては、本書の特色と目標である「おもてなし」をそのまま受けついでと思う。

『茶の世界史』が中公新書から出版されたのが一九八〇年、小生六十歳のとき。当時は茶の文化といえば、日本の抹茶を核とする茶の湯文化、茶道あるいはわび・さび文化を意味した時代であつて、茶をとくにグローバルに研究することは殆どなかった。事実、小生が『茶の世界史』を研究し始めたのは、まさに日本史の専門家としてではなく、イギリス経済史、生活史の研究者としてであつた。こうして日本茶をめぐる研究会が民博で行われたのが一九七七年から三年間、この時の小生の研究目標はどうしてイギリス本土には茶の木もなければ、植物学者でさえ茶を見たこともないというのに、世界一の紅茶愛好家となつたのか。いったいどういふことなのか。

調査してゆくにつれ、イギリス人学者を始めオランダなど欧州の大学教授で誰もアジア・ティーの歴史と繁栄の謎に手をつけていないことを知つた。こうした目的を持った緑茶並びに紅茶の経済史研究成果が、『茶の世界史』であり、『茶ともてなしの文化』である。しかし茶の文化の研究はこれで終わつたわけではない。

毎日お茶を飲みながら家庭生活における、或いは来客に対する日本緑茶の役割を辿つてゆくと、日本緑茶がいかに長時間に亘つて独自の文化の歴史を築いてきたかが分かる。例えばわび・さびがそうである。日本の茶道はもとより俳句の集會が質素ななかで、落ちついたおもむきや境地を楽しんだことを「わび・さび」と称したのである。それは特別な場合に創出されるのであつて、わび・さびが毎日の日常生活で絶えず創出されているわけではない。「もてなし」の文化を中心に考えてきた私たちにとつて江戸時代の「わび・さび」の文化は「美学」として考えればよいであろう。

日本の「おもてなし」文化の広がり

一 昨年は来る二〇二〇年のオリンピック

ック会場の勧誘をめぐつて、「おもてなし」の宣伝旗を掲げた東京が成功したことはご承知のとおりです。このことによつて「おもてなし」(ホスピタリティ)の日本文化がいつぺんに日本はもとより、世界各国に知れ渡つてしまつた。「おもてなし」は来日のお客様に対し、日本の美しい自然環境、長期にわたる歴史と文化、なかでも平和的共存する日本と東アジア諸国の宗教などの興味があつて登録された「和食」を日本人とともに満足するまで探し求めるといった夢を抱いていることであろう。

ところで温かい人間関係が形成されるためには、外国人からの温かいもてなしに注目しておいてよいであろう。もう二、三十年も以前のこと、学会報告の資料調査のためニュージーランドへ飛行機が着陸したときのこと。日本人は小生一人であつたが、機内の隣の座席のニュージーランド人と初めて会話を交わせたばかりにも拘わらず、自動車で小生を迎えにきたその足で、首都から三五〇キロ離れた彼の海岸の家に連れていつてくれた。家にはヨットがあつたが、残念ながら紅茶は出なかつた。

【事務局より】

角山榮前理事長は平成二十六年一〇月十五日に永眠されました。生前に新年号の原稿をお願いしたところ、早々の六月一日に拝受。原文そのまま掲載させて頂きました。理事長として会員一同に頂いたご厚情に感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌